

「ペトロの涙」

(ペトロの否認)

(マルコ14:66～72)

挽地茂男

2019.9.1 日本基督教団・千歳丘教会



先週から主イエスの裁判の記事を読み始めました。その裁判の流れをもう一度復習しておきましょう。ゲツセマネ付近で逮捕された主イエスは、まず大祭司アンナスの所に連行され、以下の手順をふんだと思われます。

① アンナスによる予備審問

〔ヨハネ18:12-24のみ。〈推〉この間にサンヒドリンを臨時召集〕

② カイアフアによる裁判

③ サンヒドリンによる最終決定

④ ピラトの裁判

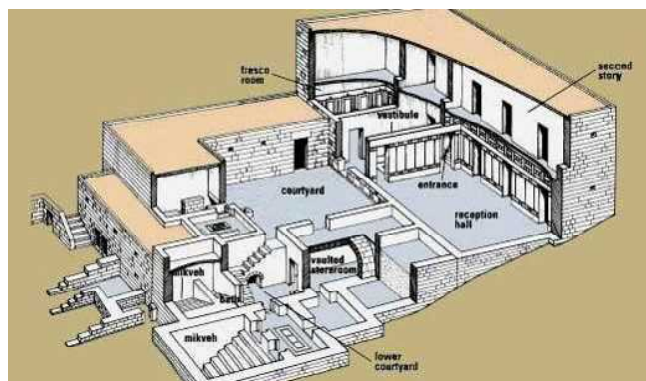
⑤ ヘロデの尋問 (only Lk23:6-12)

⑥ 十字架の判決

本日の聖書（ペテロの否認）の箇所は、カイアフアの裁判が行われている時に起こったもう一つの出来事を伝えています。それは、弟子を代表する一番弟子ペトロの出

来事です。彼が主イエスを知らないと言ったという、ペトロによる主イエスの否認の記事です。

新約聖書の学者たちの間では、このお話しはペトロを批判するためのお話し、あるいはペトロに代表されてる主流派のキリスト教を批判するお話しだと主張されることがあります。しかしこのお話はそんなに底の浅いお話しではありません。失敗が描かれるとすぐに、弟子批判だとか、主流派批判だというのは間違っています。それは弟子たちの失敗の記事は福音書の文脈の中で、はっきりとした意味や役割を持っているからです。つまり描かれる弟子たちの失敗・失態は——先週も申しましたように——信仰におけるキリスト者の神への忠誠、誠実、忠実さの源が人間の勇気や気力や努力ではなく、神の赦しの愛と恵みにあるということを示しているのです。わたし



大祭司の屋敷復元図

たちが弟子たちの失敗や失態や弱



アンナスの許に連行されたイエス

さを見る目は、放蕩息子の帰りを待つ父親の目でなければなりません

——そのために「放蕩息子」の記事を、わたしたちは3週にわたって学んだのでした。少なくとも主イエスの眼差しは、そのような眼差しです。ガリラヤで弟子たちを、弟子たちの帰りを——放蕩息子の父親のように——待つ眼差しです。

さて物語の始まりです。66 – 68節。「14:66 ペトロが下の中庭にいたとき、大祭司に仕える女中の一人が来て、14:67 ペトロが火にあたっているのを目にすると、じっと見つめて言った。「あなたも、あのナザレのイエスと一



あなたもあのナザレのイエスと一緒にいた

緒にいた。」14:68 しかし、ペトロは打ち消して、「あなたが何を言っているのか、わたしには分からないし、見当もつかない」と言った。そし

て、出口の方へ出て行くと、鶏が鳴いた。」

ペトロの一度目の否認の場面です。主イエスが予言した弟子たちの躓きは現実になりました。今一番弟子のペトロが主イエスを否定していきます。すでに読みましたように、弟子たちのつまずきについて、主イエスは予言していました。14章27 – 31節です。

14:27 イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたは皆わたしにつまずく。『わたしは羊飼いを打つ。すると、羊は散ってしまう』／と書いてあるからだ。14:28 しかし、わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤへ行く。」14:29 するとペトロが、「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」と言った。14:30 イエスは言われた。「はっきり言っておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう。」14:31 ペトロは力を込めて言い張った。「たとえ、御一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。」皆の者も同じように言った。しかもこの予言は、ペトロ

の躓きが現実のものとなる、今からわずか数時間前になされた予言でした。〔この予言の深い意図については14:27をあつかった時に学びました。〕



レンブラント「聖ペトロの否認」1660

いまや予言は現実になりました。

女中はペト

ロに向かって

言います。「あなたも、あのナザレのイエスと一緒にいた。」キリスト者にとって平常時であれば、「イエス・キリストと共にいる」とは名誉な言葉です。しかし今は危険性を孕んだ言葉になったのです。「あなたも、あのナザレのイエスと一緒にいた」という言葉は、あなたは「犯人と一緒にいた」と言うに等しい、今や、数段危険度を増した言葉です。

ペトロの反応は、この女中の言葉を、「打ち消して『あなたが何のことを言っているのか、わたしには分からないし、見当もつかない』と言った」となっています。この「打ち消して」という言葉は、初期のキリスト教の宣教（証し）で用いられる言葉です。「否定する」とか「打ち消す」とか「否む」

とか「隠す」と訳される言葉です。ふつう「告白して否まず」というように「告白する」という言葉と組み合わせて使われます。ヨハネによる福音書の1章19－20節にこの組み合わせが出てきます。

「ヨハ 1:19 さて、(洗礼者)ヨハネの証しはこうである。エルサレムのユダヤ人たちが、祭司やレビ人たちをヨハネのもとへ遣わして、『あなたは、どなたですか』と質問させたとき、1:20 彼は告白して否まず (ὡμολόγησεν καὶ οὐκ ἡρνήσατο.

新共同訳「公言して隠さず」)、『わたしはメシアではない』と言い表した。」新共同訳は「告白する」を「公言する」と訳し「否む」を「隠す」と訳しています。キリストの証人である洗礼者ヨハネは、「公言して隠さず」「告白して否まず」「打ち消すことなく」真実を告白します。ペトロも主イエスと一緒にいた事を認めるべきでしたが、身の安全が忠誠心より上位に来てしまったのです。ペトロは「告白して否まず」ではなく、反対に「告白せず否んだ」(οὐκ ὡμολόγησεν καὶ ἡρνήσατο)のです。キリストの証人としては失格です。現実に迫っている身の危

険性が彼にそれを許さなかったのです。目の前で主イエスが裁かれていく。眼前のイエスの姿が自分の姿と重なります。目の前にいるイエスと同じように成るという恐怖が迫ってきます。両手を縛られて連行され、大祭司の詰問を受け、答え方が悪いと下役から平手打ち



天国の鍵を持つペトロ

を食らい、この後どうなっていくのか。しかし危険は承知のはずだったのです。危険を承知でここまで来たので

す。ここまで来たのには、ペトロに「やはりわたしはイエスの弟子なのだ」と思いがあったからです。しかしそう思いつつ、ついに彼は主イエスを否認します。「あなたが何のことを言っているのか、わたしには分からないし、見当もつかない。」すると鶏の鳴き声（一度目）が聞こえてきます。ペトロはこの時すでに「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」という主イエスの言葉を思い出していたでしょう。鶏はまだ一度しか鳴いていません。主イエスの予言の半分は成

就していますが、今この場を離れれば、イエスの言われたとおりにはない、と思いつつもペトロは状況に翻弄されていきます。状況がどんどん動きます。

先ほどの女中は、今度は、周りにいた人たちにペトロのことを指摘し始めたのです。69－71節。

「14:69 女中はペトロを見て、周りの人々に、『この人は、あの人たちの仲間です』とまた言いました。14:70 ペトロは、再び打ち消した。しばらくして、今度は、居合わせた人々がペトロに言った。

『確かに、お前はあの連中の仲間だ。ガリラヤの者だから。』14:71すると、ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、『あなたがたの言っているそんな人は知らない』と誓い始めた。」一度目の女中の指摘から、二度目の指摘を経て、ペトロがここに紛れ込んでいることが、女中一人が知るところから、中庭にいる大勢の人々が知るところへ、個人的認識から集団的認識へと拡大しているのです。女中が周りの人々に向かって「この人は、あの人たちの仲間です」と言い——ペトロがそれを否認すると——今度は、そこに居合わせた人

々が「確かに、お前はあの連中の仲間だ。ガリラヤの者だから」と言い出します。ペトロは呪いの言葉まで口にしながら、「あなたがたの言っているそんな人は知らない」と誓います。誓いとは、もし偽りの誓いである場合は自分に対する呪いとなるのです。それでもペトロは、この場の危険を逃れるために、強い否定の言葉を口にせざるを得ませんでした。女中のペトロ発見から集団全体が知るところへと、ペトロが屋敷内にいる事の認知——すなわちその危険度——が拡大しているのです。人を圧倒する恐怖がどんな力を持つかが明らかになっていきます。そして価値観が露呈します。イエスよりわたしの命(わたしの持つ何か)が大事。周囲の指摘を否定することによって、実は、「わたしの持つ価値観」が露呈しているのです。ペトロにとって身の安全を守ることが、主イエスへの忠誠心よりも



上位に来ているのです。

二度目の「ペトロは、再

び打ち消した」という表現は——日本語訳ではよく分かりませんが——一度目と違って過去形（アオリスト）ではありません。過去進行形（未完了過去）なのです。反復や継続が強調されます。ペトロは繰り返し何度も「打ち消し続けたのです。」そしてついに、大祭司の屋敷に居合わせた人々までが「確かに、お前はあの連中の仲間だ。ガリラヤの者だから」と言い出すと、ペトロが大祭司官邸に紛れ込んでいる事実が、最大の危険度に達します。「お前は連中の仲間だ。」そして「ガリラヤの者だから」とペトロの素性からしてお見通しだと念が押されます。マタイ福音書は「確かに、お前もあの連中の仲間だ。言葉遣いでそれが分かる」（26:73）と、ペトロの言葉遣いを取り上げています。訛でどこ出身か分かります。「言葉遣いでそれが分かる」と言われれば、ペトロは訛を隠すか、沈黙を選ぶか、言葉がつかえなくなります。「ガリラヤの者」（Γαλιλαῖος）という表現は「ガリラヤもん」と訳した方が良くかも知れません。それは、ガリラヤへの偏見やイエスの運動に対する侮蔑を含んだ言葉

だからです。ガリラヤは「異邦人のガリラヤ」（イザ8:23、マタ4:15-16）と呼ばれ、一般的なイスラエルの諸地域からは、一段劣った地方と見られていたのです。「確かに、お前はあの連中の仲間だ。ガリラヤの者だから」と指摘されると、ペトロは「呪いの言葉さえ口にしながら (ἀναθεματίζειν)、『…そんな人は知らない』と誓い始めた」のです。三度目の否認です。すると、それを確認したかのような鶏の鳴き声が響きます。7 2 節。

「14:72 するとすぐ、鶏が再び鳴いた。ペトロは、『鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう』とイエスが言われた言葉を思い出して、いきなり泣きだした。」



身の安全を守るために、主イエスへの忠誠心を捨てて、ペトロは三度も「そんな人は知らない」と主イエスを否認したのです。このペトロの三度の否認は、ヨハネ 2 1 章のイエスによる三度の確認「あなたはわたしを愛するか」に繋がっています。

ペトロも、他の弟子たちと同じように、主イエスを捨てました。

しかし彼の涙には、彼の回復の可能性が宿っています。彼は鶏の鳴き声を聞いて「イエスが言われた言葉を思い出して、いきなり泣きだした」のです。「泣き出した」ということは、ペトロは自分のしたことを理解しているのです。その理解が、新たな洞察と悔い改めの基盤を提供するのです。その点では、頑なな宗教指導者たち、サンヒドリンのお歴々とは異なっているのです。

この場面を描いたルカによる福音書の記事には「イエスの眼差し」への言及があります。お読みします。ルカ福音書 22 章 56 – 62 節。一読しただけでは、マルコと同じだという印象が残ります。

ルカ 22:56 するとある女中が、ペトロがたき火に照らされて座っているのを目にして、じっと見つめ、「この人も一緒にいました」と言った。 22:57 しかし、ペトロはそれを打ち消して、「わたしはあの人を知らない」と言った。

22:58 少したってから、ほかの人がペトロを見て、「お前もあの連中の仲間だ」と言うと、ペトロは、「いや、そうではない」と言った。 22:59 一時間ほどたつと、

また別の人が、「確かにこの人も一緒だった。ガリラヤの者だから」と言い張った。 22:60 だが、ペトロは、「あなたの言うことは分からない」と言った。まだこう言い終わらないうちに、突然鶏が鳴いた。 22:61 主は振り向いてペトロを見つめられた。ペトロは、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」と言われた主の言葉を思い出した。 22:62 そして外に出て、激しく泣いた。



二度目に鶏が鳴くと「主は振り向いてペトロを見つめられた」と記されています。この「イエスの眼差し」を深く意識する作家が遠藤周作です。その眼差しへについて語っている短い文章があります。「父の宗教・母の宗教」(『文芸』1967年)という文章です。ご

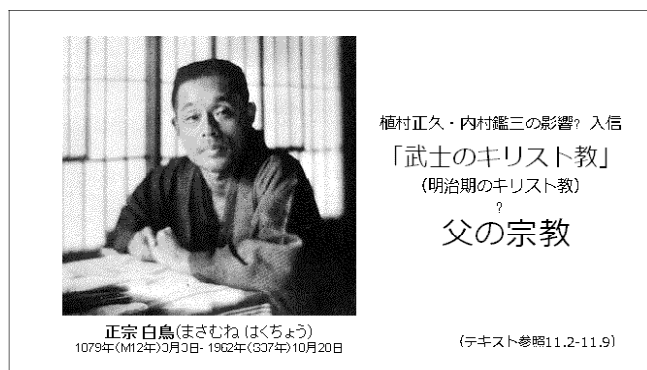
「母なる宗教」としてキリスト教

父なる宗教

母なる宗教

父母的宗教

(テキスト参照11.9-聖書-end)



紹介します。

「ことわっておくが基督教は白鳥(正宗白鳥)が誤解したように父の宗教ではない。基督教の中にはまた母の宗教も含まれているのである。それはたとえばマリアに対する崇敬というようなかくれ切支丹的な単純なことではなく、新約聖書の性格そのものによって、そのようなのである。新約聖書は、むしろ「父の宗教」的であった旧約の世界に母性的なものを導入することによってこれを父母的なものとしたのである。新約聖書の中に登場する作中人物の多くはそのほとんどが転び者、もしくは転び者的な系列の人間であることに我々は注意したい。そしてペトロでさえカヤパの司祭館で基督を捨てたのである。鶏がなく時刻、彼も亦踏絵に足をかけたのだった。その時、夜のたき火の向こうで基督のくるしい眼とそのペトロのおずおずとした眼とがあったのだ。」

正宗白鳥は岡山出身の人で、内村鑑三の影響を強く受けた人ですが、上京して早稲田大学に入学したときに植村正久から洗礼を受けています。しかしやがて彼は明治期のキリスト教、その「武士のキリスト教」の厳格さに耐えられず、早稲田卒業時にキリスト教を捨てます。そのキリスト教批判の言葉が「父の宗教」という発言に現れています。しかし遠藤周作は、それは白鳥の誤解であって、キリスト教の中には「母の宗教」も含まれていると言い出します。それは新約聖書の性格そのものであって、「『父の宗教』的であった旧約の世界に母性的なものを導入することによってこれを父母的なものとした」と語ります。その「母の宗教」がどこに現れるかと問われれば、それは主イエスの眼差しに現れると遠藤周作は言います。先ほど引用した文の最後にそれが出てきました。「**新約聖書の中に登場する作中人物の多くはそのほとんどが転び者、もしくは転び者的な系列の**



人間であることに我々は注意したい。そしてペトロでさえカヤパの司祭館で基督を捨てたのである。鶏がなく時刻、彼も亦踏絵に足をかけたのだった。その時、夜のたき火の向こうで基督のくるしい眼とそのペトロのおずおずとした眼とがあったのだ。」

キリストの弟子たちの中で、誰一人キリストを捨てなかった者はいません。全員が背教者、切支丹の言葉で言えば「転び者」なのです。その転び者を見ている主イエスの眼差しが「母の宗教」、遠藤の言う新約の宗教なのです。

遠藤周作のキリスト教理解にはお母さんの影響が濃厚に現れています。遠藤周作は、1923(大正12)年に東京の巢鴨に生まれています。3歳のときに、当時の安田銀行(後の富士銀行、現在のみずほ銀行の前身)に務める東大卒のエリート行員であった父の転勤で満州の大連に転居いたします。一家は、経済的な余裕もあって、豊かな暮らしを享受します。母親は東京音楽学校(東京芸大)ヴァオリン科の卒業生で、——家事は使用人に任せてする必要がありませんので——一日中ヴァイオリ

遠藤周作略歴 (12歳まで)

1923 (T12) 年3月27日 東京生まれ
3歳 父の転勤? 満州、大連へ
10歳 父母離婚? 神戸へ
夙川教会 (伯母がカトリック信者) へ
12歳 母とともに受洗 (1935.6.23)

ンを弾いていることもあったと言います。時に母の指先に血のにじむのを見て、芸術とはそのように全身全霊を注ぎ込むに値するものだ、そのような母の姿から芸術に対する尊敬・敬意を学んだと後に語っています。そのような家庭



兄・正介とともに

に、家庭不和の兆しが差し込みます。そのころの母の様子を遠藤はこう語っています。

「小学生時代の母のイメージ。それは私の心には夫から棄てられた女としての母である。大連の薄暗い夕暮れの部屋で彼女はソファに腰をおろしたまま石像のように動かない。そうやって懸命に苦しみに耐えているのが子供の私にはたまらなかった。横で宿題をやるふりをしながら、私は体全体の神経を母に集中していた。むつかしい事情がわからぬ

だけに、うつむいたまま、額を手で支えて苦しんでいる彼女の姿がかえってこちらに反射して、私はどうして良いのか辛かった。」(「母なるもの」新潮 1969年)

周作は徐々に孤独を味わうようになっていきます。家に帰るのが気が重くて、できるだけ長い寄り道をして、帰宅途中にある川辺で川面に向かって石を投げたり、満人のおばさんが野菜を売っているのを眺めたりして、できるだけ外で時間を過ごして、エイヤッという思いで家の敷居をまたぐ。そんな日が増えていく中で、家の使用人がくれた「クロ」という子犬が彼の孤独を癒やす相手になります。クロは周作になついて、学校に行くときには学校にもついてくる。授業のある間は、そこら辺をうろうろした、木陰に寝そべったりしているけれども、授業が終わると、周作と一緒に遊んだりして帰ってくる。こんな文章が残っています。

「面白くないんだ。ぼくは」
彼(クロ)はただ悲しげに私を直視するだけだ。

「もういやだ。こんな毎日は」
しかし、そのうるんだ犬の目に、

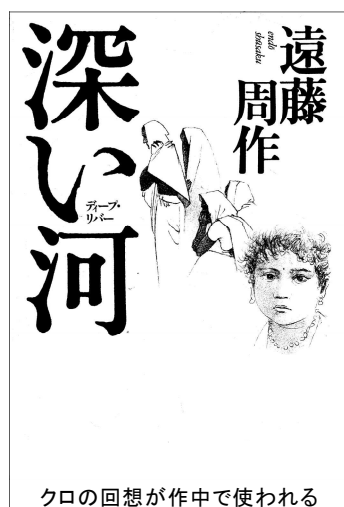
私はある慰めをいつも感じたことは確かである。あのクロの目のなかには、私が泣きたいような愛情の光があった。長い人生の歳月が経った今でも私は彼の眼差しを憶えている。少年の私の悲しみを理解してくれたあの眼差しを……。

（遠藤周作「誰でも一人ぼっちから始まる」）

しかし周作10歳のとき、ついに両親が離婚を致します。少年の生活と心に激変が起こります。そしてついに母と兄と自分の3人が日本に帰る朝、帰国のための荷物を馬車に載せ、家の敷居をまたいで外に出るとクロがいつものようについてきます。母と兄に続いて周作も馬車に乗り込みます。クロにとってはいつもと様子が少し違

います。馬車がやおら動き出します。するとクロもいつものように、やはり腰を上げて、周作少年の乗る馬車の後について

駆け足でまだついてきます。馬車の速度が少しずつ早くなって、ついに最大の速度に達しても、やはりクロは必死についてきます。しかし限界でした。しばらくはついて行けたものの、ついにクロは地面に腰を落としてしまいました。それでもクロは馬車をじっと見つめていました。少年をじっと見ていました。その姿が見えなくなるまで、クロは見ていました。少年も見ていました。その時のクロの眼差しが忘れ知れない、と遠藤は言います。憎むでもない、うらむでもない、愛するがゆえにいや増して悲しげなその目が忘れられないと言います。自分を捨てていく者をじっと見つめているその眼差しが忘れられないのです。この眼差しが、遠藤の中でイエス・キリストと重なります。自分を捨てていく転び者の弟子をみつめる目もこれと同じ目ののだということです。「ペトロでさえカヤパの司祭館で基督を捨てたのである。鶏がなく時刻、彼も亦踏絵



4歳の頃、クロと

に足をかけたのだった。その時、夜のたき火の向こうで基督のくるしい眼とそのペトロのおずおずとした眼とがあったのだ。」憎むでもない、うらむでもない、愛するがゆえにいや増して悲しげなその眼差しがペトロの目とあったのです。そして遠藤は、人の弱さを見つめるこの眼差しを、彼の描くイエスの生き様に宿させます。さらに遠藤は、その眼差しをイエスだけではなく、彼の描くさまざまな作中人物の眼に宿させます。

主イエスはペトロの狼狽ぶりを知っておられました。弟子たちが自分を捨てて、逃げていくのもご存じでした。しかし主イエスは、その弱さの先にあるものも見ておられたのです。「わたしは先にガリラヤに行く。」復活の主と再会するガリラヤ、失敗者となったがゆえに―赦しを通して―新たな顔立ちに見える主イエスの顔。そしてかつて主と共に生きたガリラヤの風景も、赦しの福音を伝える新しい使命をもった心には、少し違った風景に見えてきます。新しく始まるのです。新しく始めることが出来るのです。主イエスは、待っておられるのです。信じまし

よう。自分が信じられなくても、主イエスを信じましょう。自分が自分を赦せなくても信じましょう。

わたしたちを赦し、わたしたちを愛して下さる主イエスと共に、今週も出て行きましょう。新しい一週間を祈りと共に歩み出しましょう。祈ります。

2019.9.1 日本基督教団・千歳丘教会



14:66 ペトロが下の中庭にいたとき、大祭司に仕える女中の一人が来て、

14:67 ペトロが火にあたっているのを目にすると、じっと見つめて言った。「あなたも、あのナザレのイエスと一緒にいた。」

14:68 しかし、ペトロは打ち消して、「あなたが何のことを言っているのか、わたしには分からないし、見当もつかない」と言った。そして、出口の方へ出て行くと、鶏が鳴いた。

14:69 女中はペトロを見て、周りの人々に、「この人は、あの人たちの仲間です」とまた言いだした。

14:70 ペトロは、再び打ち消した。しばらくして、今度は、居合わせた人々がペトロに言った。「確かに、お前はあの連中の仲間だ。ガリラヤの者だから。」

14:71 すると、ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、「あなたがたの言っているそんな人は知らない」と誓い始めた。

14:72 するとすぐ、鶏が再び鳴いた。ペトロは、「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう」とイエスが言われた言葉を思い出して、いきなり

泣きだした。

14:66 Καὶ ὄντος τοῦ Πέτρου κάτω ἐν τῇ αὐλῇ ἔρχεται μία τῶν παιδισκῶν τοῦ ἀρχιερέως

14:67 καὶ ἰδοῦσα τὸν Πέτρον θερμαινόμενον ἐμβλέψασα αὐτῷ λέγει, Καὶ σὺ μετὰ τοῦ Ναζαρηνοῦ ἦν τοῦ Ἰησοῦ.

14:68 ὁ δὲ ἡρνήσατο λέγων, Οὔτε οἶδα οὔτε ἐπίσταμαι σὺ τί λέγεις. καὶ ἐξῆλθεν ἔξω εἰς τὸ προαύλιον (καὶ ἀλέκτωρ ἐφώνησεν).

14:69 καὶ ἡ παιδίσκη ἰδοῦσα αὐτὸν ἤρξατο πάλιν λέγειν τοῖς παρεστῶσιν ὅτι Οὗτος ἐξ αὐτῶν ἐστίν.

14:70 ὁ δὲ πάλιν ἡρνεῖτο. καὶ μετὰ μικρὸν πάλιν οἱ παρεστῶτες ἔλεγον τῷ Πέτρῳ, Ἀληθῶς ἐξ αὐτῶν εἶ, καὶ γὰρ Γαλιλαῖος εἶ.

14:71 ὁ δὲ ἤρξατο ἀναθεματίζειν καὶ ὀμνύναι ὅτι Οὐκ οἶδα τὸν ἄνθρωπον τοῦτον ὃν λέγετε.

14:72 καὶ εὐθὺς ἐκ δευτέρου ἀλέκτωρ ἐφώνησεν. καὶ ἀνεμνήσθη ὁ Πέτρος τὸ ῥῆμα ὡς εἰαυτῷ ὁ Ἰησοῦς ὅτι Πρὶν ἀλέκτορα φωνῆσαι δις τρίς με ἀπαρνήσῃ· καὶ ἐπιβαλὼν ἔκλαιεν.